

「サンシャインレッド[®]」の栽培管理の手引き

(品種登録名：甲斐ベリー7)

山梨県オリジナル品種ブランド化推進会議

「サンシャインレッド」(「サニードルチェ」×「シャインマスカット」)は、皮ごと食べられる赤色の2倍体品種であり、果実はマスカット香を有し食味が優れることから、県内全域において導入が期待される。栽培管理については、果樹試験場におけるこれまでの栽培や研究等から明らかになった特性に応じ、次の点に留意する。



整枝・せん定(長梢せん定)

- ①若木のうちは基本的な整枝方法に準じて樹冠拡大を行う。
主枝延長枝の切りつめは15芽程度とし、最大でも20芽までとする。
- ②成木に近づき樹勢が落ち着いてきたら、結果母枝は中庸な枝を残し、5芽程度で切りつめる。やむを得ず太い枝を残す場合は、7芽程度、細い枝は3芽程度に切りつめる。

※樹勢はシャインマスカットと同程度である。赤色系品種のため、結果母枝を多く残すと、棚下が暗くなり着色に影響するので、結果母枝の本数はシャインマスカットより少なく整理する。

冬場の管理

特に若木のうちは凍害の被害を受けやすく、他品種より枝が柔らかい特性があるため、主幹の周囲2mほどに敷きワラなどを行い大きなせん定の切り口には癒合剤を塗布し、乾燥や枯れ込みを防止する。

発芽率の向上

主枝延長枝など結果母枝が太い場合は、表1を参考に発芽促進剤を処理すると良い。

表1 発芽率向上を目的とした発芽促進剤の使用法

薬剤名	使用濃度	使用時期
メリット 青	原液～2倍	2月上旬～3月上旬

かん水

- ①発芽前
水分不足は発芽不良や発芽遅延を招くので、降雨が少ない場合は10日間隔で20mm程度のかん水を行う。
- ②落花後
落花後1ヶ月は果粒肥大を考慮し降雨が少ない場合は5日間隔で20mm程度のかん水を行う。
- ③成熟期(果粒軟化～収穫)
日焼けや果梗の黒変が助長される恐れがあるので、果粒軟化前後に高温や土壌の乾燥が続く間は、2～3mm程度の散水を気温の低い時間帯に行う。
- ④収穫後
収穫直後にタツプリかん水を行うが、その後は二次伸長を抑えるため多かん水は控える。

芽かき・新梢誘引

芽かきは次のとおり3回程度に分けて実施する。

1回目：展葉2～3枚時に不定芽、副芽を中心に芽かきを行う。

2回目：展葉8～9枚時に新梢の勢力を揃えるように、極端に強い（弱い）新梢、花穂を持たない新梢を中心に芽かきし、誘引作業もあわせて行う。

※新梢はシャインマスカットよりやや折れやすいので、注意して誘引する。

3回目：開花直前から結実後に棚面の明るさを確保するよう新梢が混み合っている部分の新梢の芽かきを行う。

なお、遅霜の恐れがある地域や風が強い地域は1回目の芽かきを行わず、2回目の誘引時に行う。

開花前の花穂の整理

着房の目安は最終着房数の2～3割増しとし、新梢の勢力に合わせて以下のとおり調整する。

①開花期に60cm未満の弱い新梢はカラ枝

②新梢長が60～120cm程度では1花穂

③新梢長が120cmを超える場合は2花穂

開花前の摘心

①花穂の充実および果粒肥大促進のため、開花直前に未展葉部を軽く摘心する。

②主枝延長枝は、樹冠拡大を図るために、この時点での摘心を行わず、展葉枚数20枚を確保してから摘心を行う。

③勢力が弱く、自然に止まる新梢では摘心は行わない。

房づくり

①ほ場の一部で開花が始まったら房づくりを開始する。

②房づくりは、肩の支梗の高さが揃う位置（房尻から4.0～4.5cm）で整形する（写真1）。

③房尻を摘むと支梗が横に伸び、密着した果房になりにくいいため、摘まない。

※1新梢に複数の花穂が着いている場合は、スラッとした花穂を残し、1花穂に整理する。

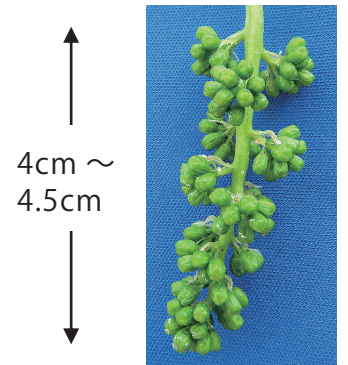


写真1 房づくり

第1回目ジベレリン処理

第1回目ジベレリン処理は、満開時～満開3日後にジベレリン25ppm(2錠/2L)にフルメット液剤5ppm(10mL/2L)を加用し、浸漬処理を行う。なお、サビ果防止のため、ジベレリン処理はキャップ（花冠）が飛んでから実施する。天候や樹勢により飛びが悪い場合は、キャップを取り除く。

※雄ずい反転性であるため、ジベレリン処理が必須である（写真2）。



写真2 満開時の花穂
(雄ずい反転性のため、雄しべが反転している)

第2回目ジベレリン処理

第2回目ジベレリン処理は、満開10～15日後にジベレリン25ppm(2錠/2L)で浸漬処理を行う。

新梢管理

新梢や副梢が旺盛に伸び、棚面が暗い場合は、新梢誘引の見直しを行い、常に棚面の明るさが均等になるように管理する（目標葉影率70%）。ただし急激に棚を明るくすると、日焼けなどの高温障害を助長するので、摘心や新梢のせん除は、こまめに行う。

収量調節

- ①摘粒作業前に、果房重と10aあたりの目標収量により、着房数を決定する。
- ②大房や着果過多は、着色不良や食味の低下を招くので、目標収量を厳守すること。
※とくに若木時は、樹冠拡大を優先し、コンパクトな果房に仕上げる。

表2 目標収量と着房の目安（成園化した場合）

目標収量(kg/10a)	果房重(g)	標準着房数(房/10a)	1間当たりの着房数(房)
1,500	550~650	2,500	12~13

摘粒

- ①摘粒は、第2回目ジベレリン処理以降、可能な限り早期に終了する。
- ②目標果房重550~650gの場合、軸長は8~9cm程度で、粒数を38~40粒程度とする。
- ③果房の上部が密着しにくい傾向があるため、上部の支梗には、やや多めに果粒を残す（写真3）。
- ④支梗が伸び、横張りしている場合は、支梗を刈り込み、密着した果房に仕上げる。

6~7粒×3支梗

3粒×3支梗

2粒×3支梗

1粒×3支梗

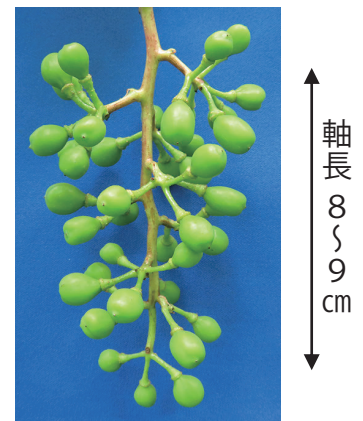


写真3
摘粒後の果房

カサかけ・袋かけ

- ①収穫までカサで管理する場合
タイベックカサの使用を基本とする。
※カサかけ以降は棚上散布とし、薬剤が果房に飛散しないよう注意する。
- ②果粒軟化期まで袋で管理する場合
摘粒後、白色袋をかけ、その上にタイベックカサをかける。果粒軟化から1週間後を目安に除袋し、タイベックカサのみ残す。

着色管理

- ①果粒軟化から1週間後を目安に白色マルチを敷設する。サンシャインレッドは直光着色性（果房に直接日光が当たらないと着色が進まない特性）が強いため、棚下が暗いと着色が進みにくい。
- ②葉影率が70%程度になるよう新梢管理を行う（写真4）。ただし、極端な新梢管理は日焼けを助長するので、数回に分けて段階的に行う。強く伸びた副梢は、葉を2~3枚残してせん除する。
※除袋や白色マルチの敷設、新梢管理の時期が遅れると、着色が進みにくい傾向があるので、着色始め以降の管理は十分に注意する。

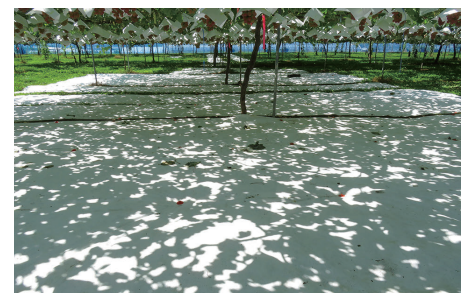


写真4 白色マルチの敷設
(葉影率70%)

収穫の目安

- ①収穫始めの目安は、「サンシャインレッド」の全農山梨県本部出荷規格に準じる。
着色：品種固有の色沢を有し、房全体が着色しているもの
糖度：18.0度以上
- ②果樹試験場（標高450m）での収穫始めは8月下旬である。

病虫害防除

黒とう病、べと病の発生が心配されるため、苗木の植え付け初年度から果樹病虫害防除暦や黒とう病防除マニュアルに準じて防除を徹底する。黒とう病の耕種的防除として、せん定時に病斑のある枝や巻きひげ等を取り除き、棚面をきれいに保つ。また、生育期に病斑がみられる葉や新梢、果房は早期に園外に持ち出す。また、黒とう病、晩腐病の感染予防のため、摘粒後は速やかにカサかけ・袋かけを行う。

肥培管理

基肥については、甲斐路系（農作物施肥指導基準を参照）に準じる。若木で樹勢が非常に強い場合は施肥量を控える。

短梢せん定栽培

1芽目の花穂着生数が少ない傾向があるため、収量の確保が難しい。また、果房の上部が密着しにくい傾向があるため、引き続き検討が必要である。現段階では長梢せん定栽培を推奨する。

ハウス栽培の適応性

露地栽培と比べ、果粒はやや小さくなるが、着色や糖度などの果実品質は同程度であり、ハウス栽培も可能である。管理作業などは露地栽培に準じて行う。

その他留意点

急激な高温や土壌乾燥などの条件下においては、果粒軟化期以降、果梗部に黒変が発生する可能性があるため、散水などを実施するとともに、土壌が硬いなどの土壌物理性が劣る場合は冬期に土壌改良を行う。果梗黒変が進行すると、果粒のしぼみが発生する場合がある（写真5）。



写真5 収穫時の果房（左：果梗の黒変、右：果梗の黒変によるしぼみ果）

本資料は、これまでの果樹試験場での試験栽培・研究に基づいて作成したものであり、必要に応じて、今後も改訂を行う予定です。なお、本資料は各指導機関の指導を受けた上でご利用下さい。

問い合わせ先：果樹試験場、各農務事務所、JA 営農指導課
印刷：JA 全農やまなし

作成 令和5年3月
改訂 令和6年3月